関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

# 宋の仁宗永昭陵と英宗永厚陵



| | |
|---|---|
| 著者 | 藤善 眞澄 |
| 雑誌名 | 阡陵 : 関西大学博物館彙報 |
| 巻 | 43 |
| ページ | 7-8 |
| 発行年 | 2001-09-30 |
| URL | http://hdl.handle.net/10112/00024060 |

# 宋の仁宗永昭陵と英宗永厚陵

藤　善　眞　澄

内藤湖南博士の提唱いらい、唐宋の変革をめぐっての論争が続けられ、今なお決着はついていない。将来もそれぞれの分野で、さまざまな視点からの分析が行なわれるであろうが、賛否はともかく、唐宋の制度で明確な違いを見事に突きつけるものがある。これまで紹介した唐朝の陵墓と大きく異なる宋朝のそれである。

すでに看た唐太宗昭陵の偉容をはじめ、高宗・則天武后の合葬墓乾陵、玄宗の泰陵などなど唐皇帝十八陵は、昭陵の九嵕山、乾陵の梁山、泰陵の金粟山といった塩梅に、すべて渭水の北に展開する山々をそのまま利用した陵墓である。これに対し北宋朝の陵墓は河南省鞏義市に散在し、隋代までにみられる盛土形式の墳墓であり、しかも陵号は唐代のそれと違って「永」字を共有する。

鞏義市は唐宋時代の鞏県であり、有名な石窟寺や唐三彩の窯址さらには筆架山を背にした詩人杜甫の生家がある。そして市の南部にひろがる田園地帯には、ここに紹介する二陵と、和義洵をはさむ北宋の陵墓があり、是非とも一度は訪れたいと念願していた地域であった。

石雕類はともかく、唐代の偉容を誇る陵墓にくらべ、遙かに見劣りのする宋の永厚陵と永昭陵を訪れたのは、昭和六十一年の夏である。開封では筆者の研究テーマの一つ『参天台五臺山記』にみえる開宝寺や大相国寺等の調査を終え、記念に木版の『清明上河図』を購入したのち、鞏県に向かった。鞏県石窟の見学をすませ、嵩岳および少林寺を経由して偃師県にある玄奘三蔵の故居をめぐるコース予定であったが、御無理を願って宋の永厚陵と永昭陵に車を走らせて貰った。本音をいえば西南に位置する神宗の永裕陵が最大の狙い目であった。成尋一行の巡礼に最大限の優遇を与え、謁見はおろか成尋に雨乞いまでも命じ、また日本との国交回復をはかるなど因縁浅からざる皇帝だからである。残念ながら時間の都合がつかず、またの機会を待つことにし、最も近い二陵だけで満足せざるを得なかったという次第。

北宋の八陵は鞏県にあるが、芝田地域にある眞宗の永定陵を除き、残りの五陵は伊洛河に注ぐ滹沱河をはさんで太祖趙匡胤と太宗趙光義の永熙陵が西村地域に、宣祖趙宏殷の永安陵が蔡庄村、そして神宗の永裕陵と哲宗趙煦の永泰陵が八陵村に、と展開する。周知のとおり八代徽宗と次の欽宗は金軍の侵攻を受けたいわゆる靖康の難に遇い、虜囚の恥辱を受けたまま異郷の土となったので、陵墓はない。

まず四代目仁宗趙禎の永昭陵は鞏県城南にあり趙普、狄青などの陪葬墓がある。陵主仁宗（一〇一〇～六三）は眞宗の第六子にあたり嘉祐八年三月二十九日、福寧殿に崩じた。その在位は四一年の長きにわたった。謚は神文聖武明孝皇帝。同年の十月二七日、この永昭陵に葬られた。最初の皇后の郭氏は廃せられており二番目の皇后である曹氏の陪葬墓がひかえる。その治世は唐太宗の「貞観の治」、玄宗の「開元の治」の向こうを張って「慶暦の治」と称えられている。確かに韓琦・范仲淹・欧陽脩・司馬光らの名臣は綺羅星のごとく輩出し、文運隆々とまではいかないまでも北宋の全盛期を現出した

ことは間違いない。しかし一方では大夏の侵寇や遼の圧迫に苦しみ、両国に対する歳幣引き上げのため国家財政は窮乏の一途を辿るばかりであった。わざわざ「喪服は日を以て月に易え」つまり喪は一日を一ヶ月に換算して短縮し、かつ「山陵の制度は務めて倹約に従え」と遺言したのも、こうした国情に心痛してのことだろうか。唐代ならば陪葬墓程度の規模しかなく荒れはてた永昭陵の周辺を逍遥しながら、とつおいつ想いを千年前にめぐらせることであった。

永厚陵主の五代英宗趙曙（一〇三二～六七）は仁宗の従弟にあたる濮安懿王趙允讓の第十三王子。はじめ仁宗に男子がなく、養子に迎えられた。のち預王の誕生とともに実家へもどされたが仁宗の遺命によって位についたという複雑な経歴の持ち主である。やがて実父の扱いや称号をめぐって重臣間で「濮議」と呼ばれる激しい意見の対立が生じたのも、そのためである。仁宗の後継者である以上、仁宗が父である、否、血のつながりや孝の道からいっても濮王が父であることに変わりはない、といった主張に侃々諤々の論争が続いた。こうした欧陽脩・韓琦グループと司馬光・富弼グループとの論争は皇太后の裁量によって一応の決着をみたが、次の神宗朝において王安石の改革に賛成する新法党と、これに反対の立場をとる司馬光らの旧法党が対立するという、歴史に名高い朋党の争いへと道を拓くことになる。

元来病弱であった英宗は、在位わずか四年、治平四年（一〇六七）正月八日に三十六歳で福寧殿で崩じた。諡は憲文粛武宣孝皇帝。その年の八月二十七日、永厚陵に葬られたのであった。陪葬は宣仁聖烈皇后高氏、神宗は長子である。

本来は周囲に神牆をめぐらした四隅に楼が設けられ、東西南北の四面中央には神門があったらしい。訪れたときは南神門につづく、参道とおぼしいあたりの両側に、宮人や文武官僚、外国使節、鎮陵将軍などの像が立ち、見事な獅子・象などがトウモロコシ畑に神域を犯され雑草にからまれながら居並んでいた。一見して子供達の遊び場になっており、草スキーならぬ土スキーを楽しむ姿もあった。当時の社会情況からすれば、やがて完全に陵墓群も取り壊され、田畑と化すのではあるまいか、と危惧の念に襲われたものである。『詩経』王風・黍離の詩にちなむ故事成語「黍離の歎」あるいは「黍離麦秀の歎」が、ふと頭をよぎった。

一世の放蕩児幽王は驪山のふもとで殺され西周は滅んだ。『詩経』小雅・正月の詩に詠う「赫々たる宗周、褒姒これを滅ぼす」である。のち洛邑へ遷った東周の大夫が旧都鎬京をよぎったところ、西周の宗廟や宮殿はくずれおち、空しく黍畑となっているのをみて嘆きの詩をつくった、というものである。それから十年、私の危惧は幸いにも杞憂に終わった。

最近得た情報では、この永昭と永厚両陵区が宋陵公園として整備されているという。文化財を大切にしない国は発展しない。歴史に背を向ける国は衰える。折をみて再訪し、今度は神宗の永裕陵を中心に調査してみたいと考えている。

永厚陵浮雕端禽